

ソウル大学訪問報告

五味政信

要旨

2000年11月、一橋大学と学生交流協定を締結しているソウル大学を訪問し、同大学の語学研究所で日本語教育を担当している研究員の方々から、ソウル大学における日本語教育事情についての情報提供を受けた。語学研究所での日本語教育状況を報告し、同時にソウル大学から一橋大学に派遣される交換留学生の日本語力についても検討する。

キーワード ソウル大学、一橋大学、学生交流協定、交換留学生、日本語教育

1. はじめに

11月のソウルは朝7時のニュース番組が始まるころ、ようやく東の空が白み始める。

7時前に目覚め、朝の光を浴びようと、ホテルの部屋のカーテンを引き開けても、街には夜明けの薄暗さの中に電灯が点在する世界が広がっている。時間を間違えたかと思わずテレビ画面の時刻を確かめてしまう。韓国と日本は標準時（兵庫県明石市は東経135度）を同じくしており、いわゆる時差がないので、東京と比較すると時刻の割に明るくないという印象になる。地図で確かめれば、ソウル（ほぼ東経127度）の方が遅く明けるのは当然で、沖縄の那覇市を北上するとソウルにぶつかる。

2000年日本留学フェア（韓国）に参加した折、一橋大学の学生交流協定校であるソウル大学校（Seoul National University、以下ソウル大学）を11月17日に訪問した。大学内のLRI（Language Research Institute、ソウル大学校語学研究所）にて、LRI専任研究員で日本語担当の藤井麻里（ふじい あさり）先生、同じく乾浩（いぬい ひろし）先生、そして国際交流担当のMichael S.A.Lee氏の出迎えを受けた。以下、3氏よりの情報および筆者の印象を報告する。

2. ソウル大学

ソウル大学は広大な敷地を誇る。元ゴルフ場という、ひと山すべてが大学のキャンパスで、つい数年前までは豊かな自然のもと、リスをよく目にしたが、近年の建造物の増加とともに見かけることが少なくなってしまったとのこと。環境保全がやはり問題となっており、敷地内の樹木に対して伐採制限が実施されている。広いキャンパス内をバス、タクシーが走る。ソウル大は1946年創立の、韓国で最初に設立された国立大学で、16学部、4大学院を有する。1975年に現在のキャンパスに移転した。学生数は約3万名、学部生約2万名、大学院生約1万名。留学生数は535名。ごく大ざっぱな割合としては、留学生の40%が中国人学生、20%が日本人学生、その他が40%とのこと。

ソウル大学は総合大学にふさわしい、立派な5階建て中央図書館をもっている。蔵書数約220万冊。閲覧室で熱心に勉強している学生たちの真剣な表情と熱気が印象的だ。閲覧室は6室あり、このうちの一室の利用時間が終日と聞いて驚いた。24時間開放されている閲覧室、というのは初耳だ。当然需要があつてのこと。夜通し机に向かう学生がそれだけいるということだろうが、このあたりの学生の側の事情、学生気質は1日だけの訪問ではみきれない。全閲覧室の座席総数は3,079席。ちなみに一橋大学図書館の閲覧室座席数は618席。一橋大の学生数がソウル大学の約5分の1ということを見ると、割合としては同程度と見てよい。ただし、ソウル大学の方は中央図書館のほか、学部ごとの図書館がある。

中央図書館の4階の書架を、藤井・乾両先生の取り計らいで許可を得て見学することができた。ここには京城帝国大学時代の書籍がそのまま残っている。山口喜一郎の2つの著作、『外国語としての我が国語教授法』（昭和8年）および『日本語教授法原論』（昭和18年）などが並んでいる¹。教育から文学、言語学、哲学、宗教などに至る、あらゆる分野の書籍が古色蒼然とした雰囲気の中で保管されている。日本語教育関係の文献リストの作成が望まれよう。

3. 日本語教育事情

LRIの日本語教育事情は以下の通りである。

初級者用のクラスとして、「文法基礎クラス」がある。このクラスにはレベル別の3つのクラスが開設されている。「日本語1」「日本語2」「日本語3」と呼ばれ、使用テキストはそれぞれ『みんなの日本語1』、『同2』、『同3』²である。「日本語1」は2クラス開講（1クラスは50名定員）、「日本語2」は1クラス（定員30名）開講、「日本語3」も1クラス（定員30名）開講されている。受講者は必ずしも「日本語1」から受講しなくともよく、受講者の学習歴によって、「日本語2」からでも「日本語3」からでも受講可能である。各クラスのレベルについて目安として提示していることは、「日本語2」は日本語学習歴3か月程度の学習者向けクラスであり、「日本語2」修了時のレベルは「日本語能力試験」4級程度に達すること、そして「日本語3」は日本語学習歴半年程度の人、となっている。

2001年1月からは、「文法基礎クラス」の上に「中級文法クラス」「上級文法クラス」（各々15名定員）の設置が予定されているとのこと。「中級文法クラス」は「日本語能力試験」2級程度の内容、「上級文法クラス」は「日本語能力試験」1級程度の内容を扱い、

¹ 『外国語としての我が国語教授法』（昭和8年）は冬至書房より復刻されている。また『日本語教授法原論』（昭和18年）は『外国語としての我が国語教授法』とほぼ同様の内容。

² スリーエーネットワーク編の『みんなの日本語初級Ⅰ』『同Ⅱ』の2巻本を韓国内の出版社「時事日本語社」が3分冊に編集し直し、各課に韓国語の解説を挟んで発売している。

使用テキストは『どんな時どう使う 日本語表現文型500』（アルク）となっている。（この両クラスに相当する現行のクラスとしては「日本語能力検定準備クラス」が設置されている。）

さらに、技能別クラスとして「初級会話」（定員15名、初級と言っても日本語を1年程度学習した学生が対象）、「中級会話」（定員15名、日本語学習歴1年半程度の学習者が対象）、また「聞き取りクラス」（定員30名）、「読解作文クラス」（定員15名、上級レベルを対象）などが開設されている。表1を参照されたい。

LRIにおける日本語の授業期間については1年を4つに分けている（春学期、夏学期、秋学期、冬学期）。春学期と秋学期（ソウル大はゼメスター制をとっており、春、秋学期はそれぞれ大学全体の第一学期、第二学期に重なっている）は10週間で、1回80分、週2回の計20回。20回分の授業料は定員数によって区別されており、50名定員クラスは約4,500円、30名定員クラスの場合が約8,000円、15名定員が約11,000円となっている。

また、夏学期と冬学期については、それぞれ夏休み中、冬休み中の開講授業であり、期間はそれぞれ5週間で、1回110分の授業を週3回、計15回の授業を行っている。夏、冬学期は集中教育のコースであり、春秋学期各10週の内容を5週間で学習することになる。

表1 LRIにおける日本語教育（2001年1月現在）

	科目名	定員	クラス数	テキスト
初級	日本語1	50	2	みんなの日本語1 みんなの日本語2 みんなの日本語3
	文法基礎クラス	30	1	
	日本語2	30	1	
	日本語3	30	1	
	初級会話	15	1	
中級	中級文法クラス	15	1	『どんな時どう使う日本語表現文型500』
	中級会話	15	1	
上級	上級文法	15	1	『どんな時どう使う日本語表現文型500』
	聞き取りクラス	15	1	
	読解作文クラス	15	1	

4. 韓国版「大学入試センター試験」の外国語に日本語が採用される

韓国版「大学入試センター試験」が訪韓直前の11月15日に実施された。韓国では国立大、私立大受験を問わず、全ての大学受験者にセンター試験受験が義務付けられている。また、高校では外国語が2つ必修で、第一外国語は英語と決められており、第二外国語は選択必修となっている。今年の「センター試験」から、第二外国語が再び試験科目として導入された³。以下は、2000年10月20日付け韓国中央日報からの抜粋で、試験前の状況を

³ 韓国で、いわゆる「センター試験」が導入されたのは1981年。1986年より第一外国語と第二外国語が分離された。そののち、1994年には、「センター試験」から第二外国語が除外され、そして2000年に第二外国語試験科目が復活した。（国際交流基金日本語国際センター「第6回海外日本語教育研究会『韓

伝えている⁴。

「大学入試での第二外国語、日本語選択が最多」(by カン・ホンジュン記者)

今年11月15日に行われる大学修学能力試験で初めて導入される第二外国語の試験では、日本語、独語、フランス語の順で志願者が多いことが分かった。

修学能力試験を主管する韓国教育過程評価院は2日、志願者全体87万2,100人のうち、30.8%の26万8,351人が第二外国語の試験(選択科目)を受け、このうち日本語を選んだ受験生は9万3,180人と34.7%を占めていることが分かった。

独語を選んだ志願者は8万2,625人、フランス語6万3,448人、中国語2万4,127人、スペイン語3,892人、ロシア語1,079人だ。

第二外国語を選択した志願者は、ほとんどが人文系で90.4%を占めており、自然系7.9%、芸術・体体系1.7%だった。

日本語、独語、仏語の順で志願者が多く、第二外国語受験者26万8千余名の約35%が日本語を選択している。韓国の多くの高校で日本語が第二外国語として採用されており、日本語を学ぶ高校生は58万人にのぼるといふ(『朝日新聞』2001年3月26日)⁵。多くの大学において日本語学科が開設されており、また大学院についても、2001年現在、日本語教育学、教育日本語学などを専攻とする「教育大学院」(修士コース)を置く大学は31校にのぼる⁶。

2000年11月の新聞報道によれば、これまで正規科目としての日本語を開設していなかったソウル大学においても、2001年3月の新学期から日本語科目が開講されるという。韓国は日本語ブームを一層加速させそうな状況と感じられた。

5. ソウル大学訪問の目的

今回のソウル大学訪問には目的が2つあった。その一つは、ソウル大学での日本語教育事情についての情報を得ること、そしてまた今後の一層の関係強化、交流推進に資するため、同大学の日本語教育担当者と互いの情報を交換し、顔の見える関係を構築することであった。この目的は100%達成されたと言ってよい。一橋大留学生センターが刊行した日本語教科書等の出版物を確実に担当者に送付することができるようになった。目的達成は

国の高校における日本語教育』2001年2月17日の資料集より)

⁴ 韓国版「センター試験」は韓国中央日報の漢字表記では「大学修学能力試験」。また、朝日新聞記事では「大学受学能力試験」(2001年3月26日付け)となっている。

⁵ 前記注2の資料によれば、韓国の高校生で日本語を学ぶ生徒の数は1993年には80万人、1998年では約73万人、1999年では約62万人であり、数としては減少しているが、いずれの場合も高校生全体の45%強を占めている。

⁶ 早稲田大学日本語教育研究科創設記念シンポジウムにおける李徳奉氏(韓国同徳女子大学教授)の報告資料より。

言うまでもなく、ソウル大の藤井先生、乾先生の献身的な力添えによるところが大きい。種々の仕事を抱えながら、多くの時間を割いてくださり、理解力の乏しい当方を相手に根気よく応対して下さったことに感謝しなければならない。また、本報告執筆に当たっても、両先生から貴重な情報提供を受けている。

二つ目はソウル大から派遣される交換留学生の日本語力に関することである。

一橋大学・ソウル大学間での学生交流協定による交換留学生の相互派遣は99年度から開始されている（協定の発効は99年3月）。3年次の学部学生が原則として2名、交換留学生として選抜されて相手校に派遣され、それぞれの専門分野に関わるテーマを1年間研究することとなっている。一橋大に派遣されるソウル大生の日本語力については、日本語能力試験2級合格程度以上の日本語力をもって来学するのが、勉強遂行に当たって望ましいことを伝えている。「日本語能力試験2級合格程度」との目安は、ソウル大に限らず、全ての学生交流協定締結校に伝えている内容であるが、時にそのレベルに達せずに来学する例もある。ソウル大からの留学生の場合もその例で、初級レベルで来日する学生が多く、ソウル大で、なぜ？ というのが我々日本語教育担当者の率直な疑問であった⁷。

ソウル大学から派遣される留学生の日本語力が来日時、充分でないのはなぜか。ソウル大学における日本語教育、あるいは日本研究の位置付けの問題が考えられよう。ここ数年、ソウル大学内で日本語学科、日本語教育学科といった名称の学科創設の議論が行われているそうだが、実現には至っていない。韓国内の他の多くの大学に日本語学科等が設置されていることに比べると、ソウル大学に日本語学科が未だ設置されていない現状は特に注意を引く。前述したように2001年の3月の新学期から正規科目としての日本語がようやく開設されたという状況である。3月から開講される新科目は、言語学科の「高級日本語」「日本語の構造」であり⁸、その他、東洋史学科の「日本国家と文化の形成」である。

それ以前に開講された、日本語以外の領域、例えば日本の歴史、社会、政治、経済等を研究する分野はどうなっているのだろうか。学部レベルでは「日本の封建社会」「日本近代国家の設立と展開」の2科目が開講されているに過ぎないとのことである。ソウル大学の日本語、日本語教育、日本研究などに対する政策的な位置付け、その取り組みの姿勢がソウル大学から派遣される交換留学生の日本語力に反映している、と言えるのではないだろうか。

ソウル大学の学部レベルで日本に関する講義が少ないということは、例えば日本経済に

⁷ ソウル大の学生の場合、日本語初級レベルで来日するが、高い潜在能力を発揮し、1年後には上級後半のレベルに達し、所期の目的を達成して帰国するのが普通である。

⁸ 「高級日本語」は上級日本語のこと。言語学科開設の「高級日本語」は、教養教育科目として位置付けられ、学科の壁を越えて受講可能とのことである。

ついでに勉学のため、一橋大学に、交換留学生となって留学しようという学生の出現の可能性が小さいことを意味するのではないか。また、このことは、LRIで日本語を学ぶ学生と、一橋大で経済を学ぶために交換留学をしようとする、おそらくは極めて少数のソウル大学生の結び付きの機会を奪うことにもなる。

ソウル大学内に日本経済、日本の政治社会、法学、ビジネスなどを講じる教員が存在し、したがって、それらの領域を学ぶ学生が存在し、そしてLRIの日本語教育と結び付いて一橋に交換留学生として派遣されてくるといった道筋を、現在のところソウル大の日本語、日本研究関連科目の極端に小さな数字は、これを阻む要因となっている。

さらに、このことは、結果として、LRIで日本語教育を受講していない学生が一橋大学に派遣されるという事態や、学部で開講されている「日本の封建社会」「日本近代国家の設立と展開」の担当教員と接触のない学生が派遣されるといった事態に帰結することにもなっていると考えられる。

6. おわりに

現地では文部省派遣の「日韓共同プログラム（韓国の高校卒業生（理工系）を日本の国立大学に留学させるもので、2000年10月に第1期生が来日した）」調査団の方々とも情報交換した。また帰国後の11月25日、26日の両日には、韓国の同徳女子大学において日本語教育国際シンポジウム「21世紀型総合日本語教育における語学・文学・文化及びメディアのあり方」が開催された。韓国日本学会（KAJA）と日本語教育学会（NKG）の共同主催で、日本、韓国からの参加者のみならず中国や台湾、欧米、オセアニアからの参加者もあり、盛況であったという。シンポジウムでの発表者の一人、筑波大の加納千恵子氏はこの会の意義について次のように述べている。

「20世紀の最後に、過去の凄惨な歴史を乗り越えて、韓国と日本が共同でこのような会を持つ時代になったことを心から喜ぶとともに、21世紀の新しい日本語教育を模索するために力を合わせていく第一歩として、意義深い会であったように思う。」（専門日本語教育研究会『専門日本語教育研究』第2号、p.73、2000年11月）

日韓関係は確実に改善の方向に向かっていることをこれらの事実は示している。だが一方で、依然として日本と韓国の間には、歴史を十分に総括していないことから発する問題が事あるごとに再燃していることも事実である。日本文化の開放、サッカーワールドカップ共同開催の一方で、高校の歴史教科書問題、文化開放政策の後退などに見られるように、今後も紆余曲折を経るなかで、関係の改善が模索されていくと思われる。そのような状況の中であって、若き知性が留学生となって互いの大学で学び合う交換留学生のプログラムは、今後重要さを増すことはあっても、その意義が減じることは考えられない。今回の訪問でつくられた、担当者との顔の見える関係を大切に、一層の関係強化を、と願いたい。